

海藤 航  
(かいとう わたる)

日本大学  
理工学部  
海洋建築工学科



大量消費が特徴となった現代社会において、アパレル産業における廃棄物の増加が深刻な問題としてあげられている。

排出量は年間約210万トンにも及んでいて、これは家電4品目（冷蔵庫・テレビ・エアコン・洗濯機）における年間の総排気量の3倍に値する。

廃棄物増加の背景には、流通構造が複雑であること、消費者が産業全体の現状を認知していないことが原因である。

そこで本計画では、東京都23区の中で最も衣服の消費量の多い東京都渋谷区において、産業全体の垂直統合、消費者への可視化による廃棄物の削減を目的とした、生産工場・商業施設・再生資源化工場の機能を複合した提案する。

この施設を訪れることが今ある一着を大切に思う、自分を見つめなおすきっかけとなる。



講評

廃棄物とはいえ商品価値を失っただけの新品の山。流行を追うアパレル産業の宿命ともいえる大量廃棄の現実に対し、生産および再生資源化過程を売り場の商品と同列に可視化し、供給側と消費者双方に問題提起する提案である。

敷地は消費先端地・神宮前。前面の街路（R246）に直交するように櫛状に建築を分節、みちゆく人を引き込むスリットを創り出している。さらに構造体である壁が建築全体を小割りにし、空間の流動性と視線の交錯を魅力あるものにしていく。工場ゾーンの壁と床をオレンジに着色し、空間サインとして散りばめている構成も面白い。ただ1階の大きな工場はプロポジションの良い空間ではあるものの、建築全体の構成をわかりにくくさせており（特に1階平面図において）、一ランク上の組み合わせ方あるいは消費者動線との絡ませ方ができれば、格段に説得力を増したと思われる点が惜まれる。

(審査委員：柳瀬 寛夫)

